

For **時間副詞**

著者	福島 富士郎
雑誌名	ノートルダム清心女子大学紀要．外国語・外国文学編，文化学編，日本語・日本文学編
巻	36
号	1
ページ	63-76
発行年	2012
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000158/

For 時間副詞

福島富士郎*

For time adverbials

Fujiro FUKUSHIMA

This paper treats the relation between telicity and two types of the time adverbials. The time adverbial with the prepositional phrase of *for* (*for an hour*) is combined with the event containing the verbs with a [-telic] feature, while the time adverbial beginning with *in* (*in an hour*) appears with the event with a [+telic] feature. Among many apparently exceptional usages of *for* time adverbials, the true exceptional usage of the *for* time adverbial is focused on in this paper, which modifies the resultant state of affair that is produced after some event, not the event itself in a narrow sense of event. Whether this type of usage is permitted or not depends on the semantic traits of the verbs. I propose two notions which enable us to shift our cognitive view to the state of affairs that is atelic.

Key words: time adverbials, telicity, resultant state

0. 序

telicity と時間副詞の関係は長く、いろんな研究者が取り上げている問題だが、Vendler(1967)、Dowty(1979) で述べられている関係を基本として、それからずれる時間副詞の用法が Rothstein(2004a,b) らによって取り上げられている。本論ではそれらの例外的な時間副詞の使い方の中でもあまり取り上げられていない用法に焦点を当てて、その用法がどのような場合に可能になるかを述べたいと思う。

John is going to France for one year.

この例文の *for one year* の解釈は、ジョンがフランスに行って滞在する期間が1年であるということを意味し、*go to France* を修飾しているような時間副詞ではない。このような時間副詞の使い方は直接的には文中の述部の時間とは関係しない。*go to France* は telicity の観点から述べると、accomplishment 動詞であり [+telic] の性質を持つので、本来は *for one year* という時間副詞とは共起しない。しかし、実際にはこのような表現が存

キーワード 時間副詞 終結性 結果状態

※ 本学文学部英語英文学科

在することが可能なわけであり、その存在理由と要件を明らかにしていく。セクション1では動詞区分と時間副詞の組み合わせの原則を述べる。セクション2では原則から外れるように見える例を提示し、実際は原則から外れるものではないことを示す。セクション3では、今まで述べた例外のような文とはかなり異なり、for 時間副詞の使い方が文中の動詞そのものと関係しているのではなく、ある出来事の結果出てくる状態を時間副詞が修飾している例を挙げ、セクション4では、その用法がどのような場合に容認されるかを明らかにし、情報量と「目的感」という概念を導入し、それによって問題の解決を図る。

1. 動詞の区分と時間副詞

本論の目的である特殊な for 時間副詞の問題に入る前に、動詞の区分と時間副詞の原則的關係を Vendler(1967)、Dowty(1979) が提案しているので、それを概観していく。彼らによれば、動詞は統語的、意味的観点から states, activities, accomplishments, achievements の4つに区分できる。¹これらの動詞区分に重要な働きをしている概念は telicity である。つまり、それぞれの動詞で表わされる出来事 (event)²に終結点 (telic point, endpoint) があるか否かである。短時間の瞬間的な出来事を表す achievement 動詞と、ある程度の時間的経過を経て出来事の終結点に至る accomplishment 動詞にはこの特性があり、動詞で表される出来事には終結点があり、終結点に至ってはじめて、動詞で表わされる意味が成立する。終結点に至らなければその出来事が真とは言えないし、又、終結点を越えてそれ以上には出来事が継続していかない、ということである。例えば、

1. John arrived at the station.
2. John reached the top of the mountain.
3. John drew a circle.
4. John drank three glasses of beer.

(1)、(2) は achievement 動詞で、駅に着いたら、「着く」という行為はそれ以上に続くことはない。駅に着いた時点で arrive という行為は終結するのである。(2) も同様で、山の頂上に着いたら、それ以上に「たどり着く」という行為が継続されることはない。(3)、(4) は accomplishment 動詞である。円を描くには一般的な状況では、ある程度の時間経過を伴った後に、一つの円が描かれるのである。その時間の経過と共に少しずつ円の形が出来上がり、円を描く円周が一回りしたら、そこで円を描くという行為は終結する。もし、次に二つ目の円を描くのであれば、行為は続くことになるが、それは別の新しい出来事 (event) が始まるのであって、一つだけの終結点がある連続した出来事とはみなされない。コンピュータ上では時間を掛けないで一瞬で「円を描く」行為は終わるかもしれないがそのようなケースは想定していない。同様に、(4) のようにビールを3杯飲むことにはある程度の時間を要し、1杯目、2杯目、3杯目のビールを飲むことは一連の連続した行為であり、3杯飲むことを一つの出来事とみなしている。4杯目以降のビールをどうみなすかについては、4杯目をひとつの区切りとするならば、それまでが一つの出来事になる。つまり、予め何杯を飲むということが決められていたり、決められていなくても一つのまとまりがあると認識すればそれが一つの終結点があるひとまとまりの出来事になるのであ

る。(4) では数詞が付いているので、それぞれの杯を飲むことが終結点を示すことができる行為を示す可能性を持つことになるが、単なる物質名詞表現の目的語になれば事態は変わり終結点が存在しなくなる。

5. John drank beer.

この例文では、ジョンがビールを何杯飲んだら、終結点に達するかは示すことが出来ない。beer という物質名詞にははっきりとした境界が存在しない。(4) のようにグラスに入ったビールならば、一つの境界を形成し、グラスの中のビールを飲み干した時点が一つの終結点となる。終結点が存在しないケースというのは、(5) のように目的語に物質名詞が来る場合の他に、不定の複数名詞が目的語になった場合も同様に終結点を見出だすことができない。このような例は後で述べることにする。

動詞区分の残り二つの state 動詞と active 動詞の例を次に見ていく。

6. John knows Mary.

7. John loves Mary.

8. John walked.

9. John pushed a cart.

(6)、(7) の know、love は state 動詞である。このクラスの動詞は出来事が成立するための終結点が存在しない。つまり、know Mary はどの時点まで行ったら know Mary と言えるのかという区切りが存在しない。know Mary の状態に一旦なったら、そのままどこまでもそれが続いていくのである。know という state 動詞の起点は一瞬であるかもしれない点で achievement 動詞と似ているが、前者が一旦発生した出来事がそのまま継続していくのに対し、後者は出来事が発生したら、その時点で出来事の終わりでもあるという点で違いがある。love Mary も同様である。どの程度まで Mary を愛したら love Mary が成立するかの定めがない。現実世界では love Mary 自体には終わりがあるかもしれないが、その時点で love Mary が真になるというのではない。(8)、(9) は active 動詞であり、その動詞で表される行為が始まったら、その時から walk、push a cart は真になる。このことは state 動詞と似ている。理論的には walk、push a cart の行為はいつまでも続けることができる。いつまで続けても出来事としての終わりが無い。継続される行為の中身は行為が始まったすぐの時点とある程度進んだ時点でも同質的であり、accomplishment 動詞が時間の経過と共に変化していくのとは対照的である。accomplishment 動詞はある行為が始まったすぐの時点と、終結点に向かってほぼ完了しそうな時点では行為の中身が異なる。

次に、以上見てきた4つの動詞の意味的特性が時間副詞とどのように結びつくかを述べる。accomplishment 動詞と achievement 動詞は終結点 (endpoint) があるので、その地点まで至るのにどのくらいの時間が掛かるのか算出可能である。円を描くのにどのくらいの時間が掛かるのか、3杯のビールを飲むのにどのくらいの時間が掛かるのか。Dowty (1979) は4つの動詞クラスの中で accomplishment 動詞と achievement 動詞は in に導かれる時間副詞 (以後、in X time) を使うことができると述べた。

10. John drew a circle in a minute.
 11. John drank three glasses of beer in a minute.

(10) は、ジョンが1分掛かって、ひとつの円を描き、終結点に達し、「円を描く」という出来事が完了したことを意味する。(11) は、ジョンが3杯のビールを飲むのに1分掛かった。1杯を飲むのに要した時間は問わない。3杯を飲むという一つの出来事に所要した時間が1分である。一方、state 動詞と active 動詞は for に導かれる時間副詞（以後、for X time）を取る。

12. John knows Mary for ten years.
 13. John walked for ten hours.

前述したように、state 動詞と active 動詞は終結点がないので、どこまでもその出来事が続くことが可能で、終結点までの所要時間を表わす in X time とは共起できない。継続的な行為をある時間幅で区切ることは可能で、それが for X time で表わされる。(12) では、ジョンがメアリを知っているのは10年間であり、know という動詞それ自身には終結点がなく、ジョンとメアリの二つの人物の間で「知る」という関係が成立しているのは10年間であるということを意味している。(13) では、「ジョンが歩く」という出来事が10時間続いたことをあらわしている。for X time で表わされる期間のどの時期を取ってもジョンがメアリを知っているということは真であるならば、ジョンが歩いたということも又、真であるが、実際には10時間の間歩きっぱなしではなくて、すこしは休憩を取って歩いていない時間もあるかもしれないが、そのようなことは無視される。

2. in X time と for X time

上述したように [+telic] の特徴を持つ achievement 動詞と accomplishment 動詞は in X time で表わされる時間副詞と共起し、一方、[-telic] の特徴を持つ state 動詞と active 動詞は for X time の時間副詞と現れ、原則的にはその逆、つまり achievement 動詞と accomplishment 動詞に for X time、state 動詞と active 動詞に in X time が付くことはない。しかしながら例文 (4)、(5) で明らかになったように、同じ drink という動詞を使っても目的語の性質によって telicity が変わることがある。或いは主語名詞の性質も telicity に関与することは Dowty (1979) で既に述べられている。このような目的語、主語名詞が telicity に影響を与えている例を挙げる (Filip 2008, Rothstein 2004a,b)。

14. John built the house in a year/*for a year.
 15. John built houses for a year/*in a year.
 16. John ran for an hour/*in an hour.
 17. John ran to the station in ten minutes/*for ten minutes.³
 18. Guests arrived for an hour/*in an hour.
 19. The guest arrived in an hour/*for an hour.

(14) と (15) の違いは、目的語に定冠詞が付いているか、それとも不定複数形かである。(14) の場合は、定冠詞が付くことで建てる家が1つであることが限定され終結点がはっきりしている。その終結点に至るまでの時間が1時間であるということを示している。(15) では目的語が不定複数形だから、何軒が建てられるのか明確なものがない。つまり終結点がないのである。理論的にはどこまでも家を建てるのが継続していけるのだが、その継続の期間を限定的に1年間ということで区切っているのである。(16) は (15) と同じ説明が可能である。(17) は to the station という前置詞が付けられることで到達点が明示され、駅まで走ることで一つの出来事が終結するので [+telic] の性質を帯びることになる。(18)、(19) の arrive はそれ自身では短時間で起こる出来事を表わすので achievement 動詞である。従って本来ならば in an hour と共起するはずであるが、(18) では逆に for an hour とのみ可となっている。ここでは主語名詞が問題になるが、(18) の不定複数名詞の guests は二人以上何人の客でも構わないので、客が到着する出来事は限りなく続くことができることになる。終結点が存在しないのである。すると、in an hour は不可能で、逆に、継続的な出来事のある期間区切って示す for an hour だけが可能ということになる。

以上までの例はセクション1で述べた4つの区分のそれぞれの動詞がどの時間副詞と結び付くかの原則に外れる例であった。このケースでは目的語や主語の名詞の特性によってどの時間副詞と共起できるかが決まり、telicity が変わることを示した。(14) の built the house が accomplishment で [+telic]、(15) の built houses が activity で [-telic] になることを示している。又、(18) の guests arrived は activity で [-telic]、(19) の the guest arrived は accomplishment で [+telic] である。

しかし、主語や目的語の性質が変わることなく全く同じ文に2種類の時間副詞が使われる事が可能な例がある。

20. I'll be there in a few minutes.

21. I'll be there for a few minutes..

この二つの文の解釈は異なる。(20) は「私は2, 3分したらそこにいるでしょう」という意味になるのに対し、(21) では「私は2, 3分間そこにいるでしょう」という意味になる。このような解釈が生まれる理由は、動詞 be には [± telic] の二つの特性があり、時間副詞がどちらの素性を選択するかを決めているのである (Declerck 1979)。in a few minutes には [+telic] の特性があり、for a few minutes には [-telic] の特性がある。(20)、(21) の be は普通には state 動詞の代表のように思われている。(21) の場合は、be が [-telic] だからこそ for a few minutes との共起が可能になっている。この be は存在という出来事が継続することを意味している。しかし、(20) の be は in a few minutes との共起が可能なので結果として、この be は [+telic] であると考えられるが、なぜそうなるのであろうか。一つの説明としては、この文の解釈が、そこでの存在という出来事が2, 3分後に始まるということであるので、この be は arrive や reach といった achievement 動詞と同じ性質である、と考える事ができる。ある瞬間にある出来事が始まるのである。つまり、状態変化 (change of stat) を表わしているのである。

22. I'll be back in a few minutes.

動きを表わす back を伴うと、be は state 動詞よりもより一層 achievement 動詞の解釈に傾きやすくなる。しかし、それでも for X time が不可能なわけではない。

23. Cooley said her husband saw her plane shoot back skyward from terminal waiting area, where a gasp rippled through the crowd. "We were back in the air for another 10 minutes," she said. Finally, the flight attendant came and said there had been another plane on the runaway. (coca)

この文の解釈は、飛行機が再び上昇し、空中であと10分待っていた、という意味である。

上で見た achievement 動詞以外にも、accomplishment 動詞も in X time と for X time の両方を取る事ができる。

24. John wiped the table in five minutes.

25. John wiped the table for five minutes. (Rothstein 2004a: 112)

wipe the table は (14) の例と同様に accomplishment 動詞だと容易に考えられる。その解釈はテーブルを拭き終るのに5分かかった、ということになる。つまり、終結点があり、そこに至るまでの時間が5分である。漸増的過程(incremental process)の出来事が発生しているのである (Rothstein 2004: 107)。一方、(25) のように for five minutes を取ると、単にテーブルを5分間拭いたということで、終結点は存在しなくてもよく、5分間に行われている出来事は、active 動詞の性質を持ち、拭き始めて1分後も、3分後も、5分後も同質的な行為が行われていることを示す。以上のことから wipe the table が[±telic]の二つの性質を持つことが分かり、いずれの素性が選択されるかは時間副詞の telicity によって決定されるのである。

更に、動詞区分と時間副詞の基本的な関係に反するような他の例として、進行形の例を挙げる。

26. We are eating in half an hour.

27. I am writing a book in six months. (Rothstein 2004: 43)

進行形は通常、出来事が進行中ということに焦点を置くものである所以終結点をもたない[-telic]であるので、[+telic]の in X time とは共起しないはずであるが、(26)、(27) のような例が容認されている。Rothstein (2004a) によれば、これらの進行形は通常の出来事が進行している様を表わすのではなく、未来を表わす進行形であり、We will eat dinner in half an hour. I'll write a book in six months. と同じ意味を持つ。30分後に夕食を食べるという行為が発生し、6ヵ月後に本を書いている出来事が発生するのである。これらは(20)、(22)と同様になる。

以上、時間副詞と、文からそれを除いた部分との関係は一見例外的に見えるケースもセクション1で述べた原則を維持していることをみた。

3. 結果状態を修飾する for X time

セクション2では一見、原則から外れる例外的な使い方と思えた時間副詞でも、実際には原則どおりの分布を示していることを見てきたが、このセクションではそのような一見例外的用法とは異なる、for X time の使い方を考察していく。

28. My father made a disgusted sound and went inside for five long minutes. When he finally came out, he had two more beer. (D.R. p.305)
29. Mr.Barcelo had been obliged to leave town on business for a few days. (Shadow p.305)
30. Jessie J. has broken her leg for three months. (Google)⁴

(28) の went inside、(29) の leave town、(30) の broken her leg は、[-telic] の for X time と共起しているが、語彙本来 [-telic] の素性を持つ表現ではないし、for X time から強制的に [-telic] の値が与えられるわけでもない。セクション2では動詞表現が in/for X time に合わせて、[±telic] から合致する値を選択していたが (28)-(30) ではそのような事が生じているとは思えない。[-telic] を持つ動詞区分は state 動詞、active 動詞であった。(28)-(30) の動詞句表現が状態を表したり、継続的同質性の行為とは考え難い。むしろ、一瞬の出来事を表わす achievement 動詞と考えるべきである。その根拠はこれらの動詞句表現が瞬間を表わす時の前置詞 at を使うことが出来るからである。

31. John went there at ten.
32. John left the town at ten.
33. John broke the window at ten.

出来事が瞬時的に終結する [+telic] の素性を持つ achievement 述部と、[-telic] を持つ for X time が何故共起できるのであろうか。これと似た表現は次のようなものがある。

34. John kicked the ball for ten minutes.

kick the ball は瞬時の出来事を表わすので achievement 動詞である。当然ながら [+telic] の性質を持つ。それにも拘らず、[-telic] の for ten minutes と共起している。kick the ball が (24)、(25) の wipe the table と同じように二つの値を持つことは不可能である。この矛盾した組み合わせを可能にするものは繰り返しの解釈である。kick the ball という一つの出来事を10分間繰り返すという解釈であれば、文として意味あるものになる。この (34) と同じような解釈を (28)-(30) に適用することはこれらの文脈の中ではできない。(28) を「5分間に何度も繰り返し中に入った」、という解釈は不可能である。その繰り返しを行うためには、中に入ったら再び外に出て来なければならないが、そのような状況は (28)

ではありえない。(30)でも繰り返し足を折るということとはありえないことである。

(28)-(30)を説明するために、Ryle(1949)の考え方を参考にしたい。彼は achievement 動詞は、同質な動きの連続である activity 動詞とは違い、二つの異質な部分からなると言っている。つまり、行為(performance)の部分と、それが終わってからの状態(state of affair)の部分から成ると言っている。彼の例で説明すると、win という achievement 動詞が成立するには、走者が走るという行為をして、テープを切る走者よりも競争相手が後ろにいるという状態でなければならない。Ryle はこのような二つの部分を持つ achievement 以外に、purely lucky achievement と呼ばれる performance の部分が欠如している achievement 動詞(cure, see など)を挙げている。それらの動詞は assiduously、systematically、attentively などの様態副詞の修飾を受けない。その理由は、様態副詞は進行中の行為の様態を表現するものなので、行為の部分を持たない動詞には修飾語としてこれらの副詞が付くことはできないからである。

35. *He has cured his patient assiduously. (Ryle 1949: 151)

Achievement 動詞で for X time と共起できるものは performance と state of affair の部分の両方を持つ動詞であろう。その state of affair の部分を for X time の時間副詞が修飾していると考えられる。

36. How to cure hemorrhoids in two days. (Google)

37. It has cured a whooping cough in two days. (Google)

これらの例から cure は in X time の時間副詞とのみ現れることができる purely lucky achievement に区分され、state of affair の部分がないので、for X time とは共起できないことになる。

(28)-(30)の例で went inside は「行く」という行為の後で、ある場所に居るという状態が生じることになる。その「居る」という状態を for five long minutes が修飾していると考えられる。leave the town は「去る」という行為の後には、その町を不在にするという状態が続き、その不在期間を for a few days で表わしている。break her leg は「足を折る」という瞬時的な行為の後で足が折れた状態が続き、その期間が for three months で表わされている。

同じように、open を例に考えてみる。

38. He opened his shop at 11.

39. Sexton finally went to Newport Beach, where he opened his shop in a matter of days. (Google)

40. He opened his shop for only two hours in the evening from 6 to 8. (Google)

(38)から、瞬時的な時間を表す at 11と共起している open は achievement 動詞とみなすことができる。また、(39)から in matter of days と共起していることから open は [+telic]

ということも確認できる。この open が (40) では for only two hours と共に使われている。for only two hours は当然ながら [-telic] であるので、本来なら [+telic] の open とは使えないはずである。しかし実際には (40) のような文が成立するということは、for only two hours が行為としての open との関係で存在しているのではなく、行為の後の状態との関係で関係が成立しているのである。店のドアを開けるという行為の後に、店が開いているという状態が続く。その状態が2時間だけ続くという意味である。

open と意味的に反対の close と shut の例を考えてみる。

41. He closed his shop at 11.

42. The statue of Liberty will close for renovation for one year. (Google)

43. Shut the door for a few minutes and try to calm yourself down. (Google)

close も shut も achievement 動詞である。「閉める」という瞬時の行為の後には閉まっている状態が続くので、その状態の期間を for X time で表わすことができる。これ以外に stop, lose も結果を表す状態を for X time で修飾できる。

open, close, shut などのようなケースではその語彙そのものが持っている二重性、つまり行為 + 状態によって説明できるもので、John opened his shop から His shop is open という状態、John closed/shut his shop から His shop is closed/shut という状態、John broke his leg から His leg is broken の状態が発生し、その状態を for X time で修飾している。

しかし、それではなかなか説明でき難いケースがある。

44. They have five children, so Elisabeth, Gisela and Iggie are invited for several weeks to their country house. (The hare p. 149)

45. Viktor comes for a few days at a time. Swim, walk, ride, shoot. (The hare p. 149)

46. I'm going to France for one year.

47. Participants gathered together for three days.

(44) と (45) は同じ文脈の中に出てくる表現であるが、(44) では彼ら、つまり Gutmann 家には 5 人の子供がいたので、Viktor の子供たちの Elisabeth, Gisla, Iggie が彼らのカントリーハウスに招かれ、そこで数週間を過ごした、という意味である。(45) は Elisabeth たちの父親である Viktor はそこにやって来て、2, 3 日を水泳や散歩などして過ごした、という意味である。open や close などの場合と異なり、invite, come という語彙からは行為の後の状態を引き出すことはできない。(44)-(47) では文脈、或いは言語外の推論から出てくる「滞在」という状態に対して for X time が当てられていると考えることができる。

大橋 (2004) は行為後の状態の期間を表す for X time の説明に認知的見解を導入している。彼によると、認知的時間は幅があり、achievement 動詞は出来事が発生した瞬間の時間だけではなく、前後にも時間幅があり、for X time は出来事発生後の時間幅に人の認知的焦点が移っての表現である、と述べている。大橋の考えは基本的には正しいが、それ

が可能な動詞と不可能な動詞が何故存在するか理由を述べなければならない。

4. 提案

(45) や (46) の come や go のような「往来」を表わす語は achievement 動詞なので本来的には for X time を取らないのだが、多くの「往来」を表わす動詞がこの表現をとることができる。

(48) I went to the station for a few minutes.

(49) I ran to the station for a few minutes.

(50) I visited the station for a few minutes.

(51) ?I walked to the station for a few minutes.

(48) は「駅へ走って行って 2、3 分そこに居た」という解釈である。(49)、(50) も同様の解釈である。(51) は英語ネイティブ間では判断にばらつきがある。(51) の for a few minutes が (49)-(50) と同じように状態を表す時間副詞としての解釈が可能と考えるインフォーマントと、この解釈を否定するインフォーマントがいる。この解釈を否定するインフォーマントにとって (51) の意味は「2、3 分駅の方へ歩いた」、ということである。また、別のインフォーマントは 1 次的意味は「2、3 分駅の方へ歩いた」だが、2 次的には「2、3 分駅にいた」の解釈も可能である、という反応であった。⁵ (51) を (48)-(50) のように解釈できない人の理由を考えると、(48) の go、(49) の run、(50) の visit は (51) の walk と違い、前者は何らかの目的があつての移動のように思える。walk にその意味合いがないとは言えないが目的感が希薄である。目的があつてある場所へ行けば当然そこで何かがなされる。勿論、そこに居るだけでもよい。人によってこの目的感の度合いの違いが容認性の違いとなっていると考えられる。

walk と似た「歩行」を表わす語がある。ramble、stroll、totter、stamp、stomp があるがこれらの動詞で walk を置き換えると (51) は完全に非文になる。ramble、stroll などの動詞は移動手段としての「歩行」そのものの意味よりは、歩行の様態に焦点が置かれている動詞である。「ぶらぶらと」歩くのか、「ふらふらと」歩くのかが意味的に重要な語であり、ここに意識が向けられている。このような状態では大橋が言うように行方後の状態へ意識が移行することが困難となる。(51) を容認しないインフォーマントは、go や run よりも walk に「徒歩で」という意味的な重みを感じているので、意識が次の状態へ移行しないのかもしれない。

同じようなことが shut/close と slam の違いにも見られる。

(52) John shut/closed the door for ten minutes.

(53)*John slammed the door for ten minutes.

slam の意味は「閉める」に加えて、同時に発生する「音」の意味もその中に含む。この「音」がこの動詞にとって重要な部分であつて、slam した後のドアの閉まっている状態に意識が向かうことがなく、その状態期間を表す for X time が使われることができない。for X

time 構文で現れることが出来ない動詞 (slam; ramble, stroll, totter など) と可能な動詞 (shut, close; walk) を比較すると、後者は意味が単純であるのに対し、前者は意味が複雑、つまり情報量が多いという違いがある。情報量が多いということは、焦点がこの動詞に置かれ、後者の動詞が持つ行為の後の状態に意識が行かないということにつながる。これは、高見 (1995、第3章) が統語的な「名詞句からの外置」の制約について、情報という意味的観点から説明しているのに似ている。

54. A man spoke yesterday with blond hair.

55.*A man whispered/grumbled/yelled yesterday with blond hair.

(高見1995: 148)

例文における with blond hair は本来、A man with blond hair を構成するものだが、名詞からの外置により右方へ移動したものである。(54) と (55) の文法性の差は、動詞の意味的情報量の差から生じていると高見は主張する。speak は「発話」の最も単純で、中立的な動詞であるのに対し、whisper, grumble, yell は単なる「発話」にプラスして、「低い声で」、「静かに」、「大きな声で」のような情報を含んでいる。このことから高見は「名詞からの外置にたいする機能論的制約」を提案している。

しかし、次の例文は意味の情報量という観点から考えてみても、容認性が説明できないように思える。

56. John entered the room for ten minutes.

57. John dashed/rushed into the room for only one minute.

58. John stole into the room for ten minutes.

(56) の enter は中に入る動作を表わすのに最も中立的な動詞に思える。それに対し、dash into, rush into, stole into は情報量が多い。dash, rush は速い速度感が含まれていて、steal は遅い速度感が含まれ、enter は速度感には全く関与しない。このような条件で何故、(57) と (58) が許されるかの理由は動作の「目的感」の違いにあることを提案する。「目的感」とは、ある動作を誘引、動機付けする要素のことである。例えば、「ジョンは家に入った」と「ジョンは家に忍び入った」でははっきりとその行為の動機付けが異なる。人に気づかれずに入って、そこで何かをする、或いは、何もしないでじっと息を潜めて待つ、等という「目的感」が「忍び入る」には強く出ている。dash, rush, steal が持つ速度感はある目的があってこそ使われるものである。勿論、enter も普通には何かの目的があって部屋に入るというのが一般的な解釈だと思われる。情報量の多寡が行為後の状態へ意識を向ける事を妨げることを上で述べたが、目的感の情報量よりも意識の移行には優先される要因である。目的感というのは移動したある場所での単なる存在を含めて、なんらかの状態、事態を引き起こすことを目指すことである。つまり、目的感が強ければ状態、事態へ意識が向くということがわかる。(56)-(58) の動詞は、このような目的感がはっきり出ているので状態への意識が向きやすくなり、for ten minutes の時間副詞が使われることが可能になるのである。

移動を表わす動詞の中でも逆に情報量が多いと思えるものが for X time と共起している場合がある。

59. John drove/flew to San Francisco for a week.

60.*John reached/arrived at/get to San Francisco for week.

(59) では単なる移動ではなく、車や飛行機でという情報も含まれている。しかし、これらも移動の目的感が強く、その後の状態へ意識が向きやすい。それに対し、Pinon(1999) が謎だと言っている reach, arrive を使った文の非文性は、これらの動詞は情報量が少なく、状態への意識の向きやすい性質があるにも拘らず、目的感が極めて希薄であるので状態への意識が向きにくいのである。つまり、ある場所へ到着(reach, arrive)するということは、動機付け、目的感があってから行動を起こす動詞 (go, run) とは違い、その時点では目的感が含まれず、状態への意識の移行が起こらず、for X time が使えないのである。

5. まとめ

時間副詞と動詞の関係は殆どが原則どおりの結びつきで説明できるが、for X time には原則では説明できない用法があり、行為そのものと関連しているのではなく、その行為の結果出てくる状態と関連して使われるものがある。行為後に状態を付随させることができる動詞は achievement 動詞であるが、全ての achievement 動詞にそのような性質があるわけではない。また、状態を付随させる動詞であっても動詞の情報量、目的感という観念が状態へ意識を向けさせるのに影響を与えることになる。このような、例外的な for X time の用法も、結局は状態を修飾するものであるので、考え方によっては原則どおりの使い方であると言えないこともない。

注

用例の容認性の判断には本学科の英語ネイティブの教員の協力を頂いた。とりわけ、Stephen Schrader 先生には感謝したい。例文の最終責任は著者にある。

1. accomplishment と achievement の訳語に関しては統一されたものがなく、複数の日本語訳があるので、ここでは混乱を避けるために英語表現のままに使う。
2. event という概念の中には所謂、action を示す動詞だけではなく、state 動詞も event 動詞の中に含めて論を進めていく。
3. この場合の for ten minutes は、注 5 で見るように容認可能ではあるが in ten minutes と同じ意味で使えるわけではない。ここでは、あくまで in ten minutes の意味では for ten minute は使えないことを示している。
4. 同じ動詞を使っても、容認性が異なる。

i) *John broke the window for two months.

ii) John broke his leg for two months.

例文 i) と ii) の違いは、i) の主語 John が agent であるのに対し、ii) の John が theme であることに原因があるように思える。影響を受ける his leg は John の一部であり、

結局は主語の John の状態を問題にしている。ある行為の結果、状態が生じるのは目的語ではなく主語の状態についてであり、その主語は theme でなければならない。

5. achievement 動詞はセクション 1 でみたように、その出来事そのものを for X time で表現できないのが原則であった。しかし、実際には achievement 動詞の出来事が for X time で表現できるということがある。この解釈では、例えば (51) は I walked toward the station for a few minutes. のように to ではなく toward の前置詞がより適格になる。

If you walked your dog for ten minutes before school yesterday and then walked to school for 15 minutes, you would add the times for walking together and write 25 minutes in the box next to Walking in Before School column. (coca)

この例では学校へ歩く時間が15分であって、決して学校に居るのが15分ではない。しかし、このような for X time は in X time と同じではない。in X time はその時間が来れば出来事の終結点に至るのに対し、for X time はそれを含意しない。John went to the station for a few minutes は、更に文を続けて but he returned home without arriving at the station. と言える。John walked to the station for ten minutes. はまた、あるインフォーマントは、15分が歩いている時間を表わしているならば walk for 10 minutes to the station の配列にならねばならない、と言う。

参考文献

- Declerck, Renaat. 1979 Aspect and the bounded/unbounded (telic/atelic) distinction. *Linguistics* 17. 760-794.
- Dowty, David. 1979 *Word meaning and Montague grammar*. Dordrecht: Kluwer.
- Filip, Hana. 2008 Events and maximalizations: The case of telicity and perfectivity. in D.Rothstein (ed) *Theoretical and crosslinguistic approaches to the semantics of aspect*. 217-256. Amsterdam: J.Benjamins.
- 大橋一人. 2004 「認知的観点から見た事態と時間」 英語学論説資料38-1, 348-355
- Pinon, Christopher. 1999 Durative adverbials for result states. *WCCFL 18 Proceeding*. 420-433.
- Rothstein, Susan. 2004a *Structuring events*. Oxford: Blackwell Publishing.
- 2004b Derived accomplishments and lexical aspect. in J.Gueron & J.Lacarme(eds) *The syntax of time*. 539-553. Cambridge: The MIT Press .
- Ryle, Gilbert. 1949 *The concept of mind*. London: Barnes and Nobles.
- 高見健一 1995 『機能的構文論による日英語比較：受身文、後置文の分析』 東京：くろしお出版
- Vendler, Zeno. 1967 *Linguistics in philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.

用例出典

coca: Davies, Mark. *Corpus of Contemporary American English*. Brigham Young University.

D.R.: Hart, John. 2007 *Down river*. New York: St. Martin's Paperbacks.

Shadow: Zafón, Carlos Ruiz. 2001 *The shadow of the wind*. (translated by Lucia Graves in 2004) New York: Penguin Books.

The hare: De Waal, Edmund. 2010 *The hare with amber eyes*. London: Vintage Books.